# 木組みやぐらからの「ふれ太鼓」

最近、朝早く地下鉄名城公園から市役所まで歩くことが多い。そんな折、遠くから小気味よい太鼓の音が聞こえてきた。大相撲名古屋場所が開催されている愛知県体育館の方からだ。やぐらが見えてきた。

やぐらの上で、二人が太鼓を叩いている。太鼓の音色に引き寄せられ、やぐらの近くに行った。木組みのやぐらの作りは興味深かった。この前を若い力士や観客・観光客が会場の方に向かっていた。なかには「スマホ歩き」の若い力士の姿もあった。

朝日新聞 7 月 12 日の「+C SPECIAL」に名古屋場所が特集されていた。「木組みやぐらは技の粋」と解説されていたので紹介したい。

本場所中、1 日の取組の始まりと終わりを告げるふれ大根。「テケテケテケ---」との音色が、愛知県体育館近くに立つ、高さ約 16 メートルの木組みのやぐらの上から響いてくる。やぐらを地面から木で組むのは、年 6 回の本場所の中で名古屋だけ。毎年、場所前に組み立て、場所後は解体する。

東京・国技館のやぐらは常設で、鉄製のエレベーター完備。大阪、九州は木組みだが、小型化して会場の建物に設置されている。準場所時代から続く、そんな風情あふれる光景が 2005 年、存続の危機に直面した。国の特別史跡の名古屋城。敷地内の地面に深さ 1 メートルほどの穴を掘り、丸太の柱を埋めて固定する工法が文化財保護法に抵触する、と名古屋市教育委員会が日本相撲協会に「物言い」をつけたのだ。

会場設営を担う建設会社、安藤組(名古屋市)の安藤浩司社長(53)は当時社長だった父・定夫さんと頭を悩ませた。試行錯誤の末、約 2 メートル四方の鉄製の「はかま」を柱にはかせ、土台とする工法に行き着いた。やぐらは「八」の字のように上部が細くな

る構造。親柱を入れる四つの円柱も内側に傾斜するように調整した。「完成した時は『やれやれ』という感じでした」と安藤社長。素材のヒノキは、三重県内の山林に何度も通って探し出した。

目下の悩みは後継者不足だ。4 トントラック 3 台分にもなる木材をわら縄で締めて組み立てていく。釘は一切使わない。縄の締め方一つにも職人の技が光る。安藤社長は「50 代後半の職人が多くなった。普段あまり使わない技術だが、昔の職人の知恵も感じることができる。何とか伝えていきたい」と話す。

（2015 年 7 月 19 日）